



## 小説と「礼儀作法」



Photo by 川合穂波

阿部公彦  
東京大学

小説の「礼儀作法」ということが最近気になっていいる。たとえば手紙のように読み手が限定される文章では、出だしでも明確に「作法」が意識される。「こんにちは！」なのか、「ごぶさたしています」なのか、「桜の便りが次々に聞かれるこの折」なのか、親しさの度合いによってこちらの態度も決まる。では、小説ではどうか。そもそも小説は誰が読むのかわからないものだ。書いてある内容も文字通りフィクション。作法など意識しようがなさそうに見える。所詮すべては「嘘」なのだ。しかし、虚構の世界であればこそ、「礼儀作法」がより大事になってくる、というのが私の考えである。このことについて簡単に説明してみたい。

「安心型社会」と「信頼型社会」という分類がある。心理学者の山岸俊男は『信頼の構造』(東京大学出版会、一九九八年)の中で、「安心」と「信頼」という区別を立て、仲間内での価値観の共有などからもたらされるのが「安心」、仲間うちを超えた他者一般や人間一般に対するのが「信頼」だとしている。この区別を基準にすると、社会にも二つの潮流が見て取れるのがわかる。まず一方にあるのは、どちらかというとい存の社会的安定感や

価値の共有に頼る、いわば「安心型」の社会。他方には、安定感があまりなく価値も共有されていない、つまり、いちいち誰を信頼するのか個別に判断しなければならぬ「信頼型」の社会。前者の典型は、たとえば日本。後者はアメリカである。

この安心型と信頼型という二分法を言語学者の滝浦真人は敬語にも応用してみた(『日本語は親しさを伝えられるか』

岩波書店、二〇一三年)。私たちは敬語というといきわめて日本的なものだと思いがちだが、近年「ポライトネス」(「配慮」と訳される)という新しい概念が確立され、「敬意の表し方」の普遍性に注目が集まるようになってきた。どうやら他者との距離の取り方について、人類全体に共通した何かがあるらしい——そんなことがこの概念を通して見えてくる。ただ、それでも日本的な敬意・親しさの表現と、普遍的に世界中で見られる配慮には若干の違いがある。滝浦はこの違いを「安心型」か「信頼型」かという枠で説明する。

日本的な敬語表現は明確に決まりがある。朝起きたら「おはようございます」。道で会ったら「こんにちは」。まるで判で押したように守られるルールだ。やらなければ叱られるが、やってさえおけば叱られない。まさに「やっておけば安心」の「安心型」なのである。これに対しそうでない方法がある。決まった形はないが、相手や状況に応じて、たとえば質問や同意によって配慮のジェスチャーを示すというやり方である。後者の場合、明確なルールがないだけに、こちらの提示したものを相手が読み取るかどうかで

意図が通じたり通じなかったりする。このように状況に応じてシグナルをやり取りして行われる配慮を滝浦は「ポライトネス型」と呼び、ルール重視の日本的な「敬語型」と区別する。ポライトネス型は、ルールが明確に共有されていない分、不安定である。「これだけやってあげば!」という安心感はない。しかし、文化を共有しない共同体外からの他者も配慮のやり取りに参加できるといふ利点がある。システムが開かれているのである。

さて、ここからが小説の話だ。近代のヨーロッパで発達した小説というジャンルでは、個人のごくプライベートな体験や事件を多数の読者に向けて曝くという形がとられた。これは画期的なことだった。近代になって個人の内面やプライバシーといった感覚が生まれたからこそ、それを「暴露」することも可能になったのである。そこに小説的「関心」も生まれた。ただ、はじめから小説が不特定多数の読者に向けて語られたわけではない。一八世紀の小説がしばしば書簡体の語りという形をとったことからわかるように、小説といえども語るためには顔の見える読み手を設定することが多かった。一九世紀ともなると、「神の視点」と

呼ばれる、世界全体を俯瞰するような語り口が主流となってくる。現在では誰かに語りかけるようなスタイルの小説はむしろ少数派だ。しかし、対人関係が見えなくなっただとしても、聞き手/受け手の関係は依然として大事である。というのも——他のジャンルの文章と比較してもそうだと思うのだが——小説は作品ごと大きく異なる「読み方のルール」を読者に提示するからである。背景、設定、人物、文体など、すべてをゼロから構築するのが小説なのである。受け手の柔軟な協力なくしては成り立たない。語り手は、どのような協力が必要かをいちいちシグナルとして示す必要があるし、聞き手/受け手もそれを解釈し消化することではじめて内容が受け取れる。小説を読むという行為の胆は、このようなシグナルのやり取りにあると言っても過言ではない。

こうしてみると、小説の礼儀作法が「とりあえず型を守っておけば安心」という敬語型ではなく、そのたびにジェスチャーを示して相手と交渉するようなポライトネス型なのは明白だろう。これは近代になって、形式重視の定型詩のようなジャンルが廃れていったこととも連動

している。近代社会では、見知らぬ他者と交渉する機会が劇的に増え、それだけに各自が決まった形式に寄りかかるばかりでなく、新しい人間関係に柔軟に対応することを求められてきた。文章も例外ではない。小説はそうした出会いを練習するための装置となってきたのである。それにしても不思議なのは、私たちにこのような読解の能力が備わっているということである。小説の語り手からの要請を受け入れ、構築に協力することが私たちにできる。たいしたものだと思う。それを単に想像力と呼ぶだけでは十分でない。コミュニケーションの円滑化や、対人関係の調整ともかわる複雑な心のメカニズムが、小説を読むという作業にはかかわっている。まだまだ私たちが気づいていないことは多い。それだけにおもしろい発見がありうる領域だと思う。このあたりの問題意識をもとに私は昨年『善意と悪意の英文学史——語り手は読者をどのように愛してきたか』(東京大学出版会、二〇一五年)を刊行し、英文学作品の中で語り手がどのように「礼儀作法」や「配慮」を実践してきたか考察したので、参考にしていただければ幸いである。